

芥川龍之介

追憶





追

憶



## 埃

僕の記憶の始まりは数え年の四つの時のことである。

と言っても大した記憶ではない。唯広さんと言う大工が一人、梯子はしごが何かに乗ったままげんのう玄能で天井を叩いている、天井からはぱっぱと埃が出る——そんな光景を覚えていたのである。

これは江戸の昔から祖父や父の住んでいた古家を毀こわした時のことである。僕は数え年の四つの秋、新らしい家

に住むようになった。従って古家を毀したのは遅くもその年の春だったであろう。

## 位牌

僕の家のお壇には祖父母の位牌いはいや叔父の位牌の前に大きい位牌が一つあった。それは天保何年に歿した曾祖そうそ父母ふぼの位牌だった。僕はもの心のついた時から、この金箔の黒ずんだ位牌に恐怖に近いものを感じていた。

僕の後聞いた所によれば、曾祖父は奥坊主を勤めて

いたものの、二人の娘を二人とも花魁おいらんに売ったと言う人だった。のみならず又曾祖母も曾祖父の夜泊りを重ねる為に、家に焚たきもののない時には鉞なたで縁側を叩き壊し、それを薪たきぎにしたと言う人だった。

## 庭 木

新しい僕の家の庭には冬青もち、榧かや、木斛もくこく、かくれみの、臘梅ろうばい、八つ手、五葉ごようの松などが植わっていた。僕はそれ等の木の中でも特に一本の臘梅を愛した。が、五葉の松

だけは何か無気味でならなかった。

「てつ」

僕の家には子守りのほかに「てつ」と云う女中が一人あつた。この女中はのちに「源さん」と言う大工のお上さんになつた為に「源てつ」と言う渾名あだなを貰つたものである。

なんでも一月か二月の或夜ある、（僕は数え年の五つだった）地震の為に目をさました「てつ」は前後の分別を失つた



と見え、枕もとの行灯をぶら下げたなり、茶の間から座敷を走りまわった。僕はその時座敷の畳に油じみの出来たのを覚えている。それから又夜中またの庭に雪の積もっていたのを覚えている。

## 猫の魂

「てつ」は源さんへ縁づいたのちも時々僕の家へ遊びに来た。僕はその頃「てつ」の話した、こう云う怪談を覚えてる。——或日の午後、「てつ」は長火鉢に頬杖を

つき、半睡半醒の境にさまよっていた。すると小さい火の玉が一つ、「てつ」の顔のまわりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははっとして目を醒しました。火の玉は勿論もちろんその時にはもうどこかへ消え失うせていた。しかし「てつ」の信ずる所によればそれは四、五日前に死んだ「てつ」の飼い猫の魂がじゃれに来たに違いないと云うのだった。

## 草双紙

僕の家の本箱には草双紙が一ぱいつまっていた。僕はもの心のついた頃からこれ等の草双紙を愛していた。殊に「西遊記」を翻案した「金毘羅利生記」を愛していた。 「金毘羅利生記」の主人公は或は僕の記憶に残った第一の作中人物かも知れない。それは岩裂の神と云う、兜巾鈴懸けを装った、目なざしの恐しい大天狗だった。

## お狸様

僕の家には祖父の代からお狸様と云うものを祀<sup>まつ</sup>っていた。それは赤い布団にのつた一對の狸の土偶<sup>でく</sup>だった。僕はこのお狸様にも何か恐怖を感じていた。お狸様を祀ることはどういう因縁によつたものか、父や母さえも知らないらしい。しかし未だに僕の家には薄暗い納戸<sup>なんど</sup>の隅の棚にお狸様の宮を設け、夜は必ずその宮の前に小さい蠟燭をともしている。

## 蘭

僕は時々狭い庭を歩き、父の真似をして雑草を抜いた。実際庭は水場みずばだけにいろいろの草を生じ易かった。僕は或時冬青もちちの木の下に細い一本の草を見つけ、早速それを抜きすててしまった。僕の所業を知った父は「せっかくの蘭を抜かれた」と何度も母にこぼしていた。が、格別、その為に叱られたという記憶は持っていない。蘭は何処でも石の間に特に一、二茎植えたものだった。

## 夢中遊行

僕はその頃も今ののように体の弱い子供だった。殊に便秘しささえすれば、必ずひきつける子供だった。僕の記憶に残っているのは僕が最後にひきつけた九歳の時のことである。僕は熱もあつたから、床の中に横たわつたまま、伯母の髪を結うのを眺めていた。そのうちにいつかひきつけたと見え、寂しい海辺を歩いていた。その又海辺には人間よりも化物に近い女が一人、腰巻き一つになつたなり、身投げをする為に合掌していた。それは「みようみよう妙々

車くるま」と云う草双紙の中の插画だったらしい。この夢うつつの中景色だけは未だにはつきりと覚えている。正気になった時のことは覚えていない。

「つうや」

僕が一番親しんだのは「てつ」の後にいた「つる」である。僕の家はその頃から経済状態が悪くなったと見え、女中もこの「つる」一人ぎりだった。僕は「つる」のこゝとを「つうや」と呼んだ。「つうや」は当り前の女より

もロマンティック趣味に富んでいたのである。僕の母の話によれば、ほうかいぶし法界節が二、三人編笠をかぶって通るのを見て、「敵かたきう討ちでしよるか？」と尋ねたそうである。

## 郵便箱

僕の家うちの門かどの側わきには郵便箱が一つとりつけてあった。母や伯母は日の暮れになると、代る代る門かどの側わきへ行き、この小さい郵便箱の口から往来の人通りを眺めたものである。封建時代らしい女の気もちきもちは明治三十二、三年頃



にもまだかすかに残っていたであろう。僕は又またこう云う時に「さあ、もう雀色時すずめいろどきになったから」と母の言ったのを覚えている。雀色時と云う言葉はその頃の僕にも好きな言葉だった。

## 灸

僕は何かいたずらをする、必ず伯母につかまっては足の小指に灸きゆうをすえられた。僕に最も怖しかったのは灸の熱さそれ自身よりも灸をすえられると云うことであ

る。僕は手足をばたばたさせながら「かちかち山だよう。ぼうぼう山だよう」と怒鳴ったりした。これは勿論火がつく所から自然と聯想を生じたのである。

## 剥製の雉

僕の家へ来る人々の中に「お市さん」と云う人があった。これは代地かどこかにいた柳派やなぎはの「五りん」のお上さんだった。僕はこの「お市さん」にいろいろの画本や玩具などを貰った。その中でも僕を喜ばせたのは大きい

剥製の雉きじである。

僕は小学校を卒業する時、その尾羽根の切れかかった雉を寄附していったように覚えている。が、それは確かではない。唯ただ未だに可笑しいのは雉の剥製を貰った時、父が僕に言った言葉である。

「昔、うちの隣にいた×××××（この名前は覚えていない）と云う人は丁度元日のしらしら明けの空を白い鳳凰ほうおうがたった一羽、中洲の方へ飛んで行くのを見たことがあると言っていたよ。尤もつとも出たらめを云う人だったがね。」

## 幽 霊

僕は小学校へはいつていた頃、どこの長唄の女師匠は亭主の怨霊おんりようにとりつかれているとか、ここの仕事師のお婆さんは嫁の幽霊に責められているとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それを又僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしていた「おてつさん」と云う婆さんである。僕はそんな話のためか、夢とも現うつともつかぬ境にいろいろの幽霊に襲われ勝ちだった。しかもそれ等の幽霊は大抵はおてつさんの顔をしていた。

## 馬車

僕が小学校へはいらぬ前、小さい馬車を驢馬ろばに牽ひかせ、その又馬車に子供を乗せて、町内をまわる爺さんがあった。僕はこの小さい馬車に乗って、お竹倉や何かを通りたかった。しかし僕の守りをした「つうや」はなぜかそれを許さなかった。或は僕だけ馬車へ乗せるのを危険にでも思った為かも知れない。けれども青い幌を張った、玩具よりも僅かに大きい馬車が小刻みにことこと歩いて

いるのは幼目にもハイカラに見えたものである。

## 水 屋

その頃はまだ本所も井戸の水を使っていた。が、特に飲用水だけは水屋の水を使っていた。僕は未だに目に見えるように、顔の赤い水屋の爺さんが水桶の水を水甕の中へぶちまける姿を覚えている。そう言えばこの「水屋さん」も夢現の境に現われて来る幽霊の中の一人だった。

## 幼稚園

僕は幼稚園へ通いだした。幼稚園は名高い回向院の隣の江東小学校の附属である。この幼稚園の庭の隅には大きい銀杏が一本あった。僕はいつもその落葉を拾い、本の中に挟んだのを覚えている。それから又また或円顔の女生徒が好きになったのも覚えている。唯如何にも不思議なのは今になって考えて見ると、なぜ彼女を好きになったか、僕自身にもはっきりしない。しかしその人の顔や名前前は未だに記憶に残っている。僕はつい去年の秋、幼稚

園時代の友だちに会い、その頃のことを話し合った末、  
「先方でも覚えているかしら」と言った。

「そりや覚えていないだろう」

僕はこの言葉を聞いた時、かすかに寂しい心もちがした。その人は少女に似合わない、萩や芒すすきに露の玉を散らした、袖の長い著物を著ていたものである。

## 相 撲

相撲も亦また土地がらだけに大勢近所に住まっていた。現



に僕の家の裏の向うは年寄りの峯岸の家だったものである。僕の小学校にいた時代は丁度常陸山ひたちやまや梅ヶ谷の全盛を極めた時代だった。僕は荒岩亀之助が常陸山を破った為、大評判になったのを覚えている。一体ひとり荒岩に限らず、国見山でも逆鉾さかほしでもどこか錦絵の相撲に近い、男ぶりの人に優れた相撲はこうざいしやく悉しつ僕ぼくの鼻肩ひいきだった。併しかし相撲と云うものは何か僕には漠然とした反感に近いものを与え易かった。それは僕が人並みよりも体の弱かった為かも知れない。又平生見かける相撲が——髪を藁束ねにしたふんどし禪ぜんかつぎが相撲膏を貼っていた為かも知れな

い。

## 宇治紫山

僕の一家は宇治紫山と云う人に一中節を習っていた。この人は酒だの遊芸だのにお蔵前くらまえの札差しの身上をすっかり費してしまつたらしい。僕はこの「お師匠さん」の酒の上の悪かつたのを覚えている。又小さい借家においても、二、三坪の庭に植木屋を入れ、冬などは実を持った青木の下に枯松葉を敷かせたのを覚えている。

この「お師匠さん」は長命だった。なんでも晩年味噌を買いに行き、雪上りの往来で転んだ時にも、やっと家へ帰ってくると、「それでもまあ禪だけ新しくってよかった」と言ったそうである。

## 学 問

僕は小学校へはいった時から、この「お師匠さん」の一人息子に英語と漢文と習字とを習った。が、どれも進歩しなかった。唯英語はTやDの発音を覚えた位である。

それでも僕は夜になると、「ナシヨナル・リイダア」や「日本外史」をかかえ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通って行った。It is a dog——ナシヨナル・リイダアの最初の一行は多分こう云う文章だったであろう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残っているのは、何かの拍子に「お師匠さん」の言った「誰とかさんもこの頃じゃ身なりが山水さんすいだな」と云う言葉である。

## 活動写真

僕が始めて活動写真を見たのは五つか六つの時だったであろう。僕は確か父と一しよにそういう珍しいものを見物しに大川端の二州楼にしゅうろうへ行つた。活動写真は今のよ  
うに大きい幕に映るのではない。少くとも画面の大きさはやつと六尺に四尺位である。それから写真の話も亦今の  
ように複雑ではない。僕はその晩の写真の中に魚を釣  
っていた男が一人、大きい魚が針にかかったため、水の中へまっ逆様にひき落とされる画面を覚えている。その

男は何でも麦藁帽をかぶり、風立った柳や芦を後ろに長い釣竿を手にしていた。僕は不思議にその男の顔がネルソンに近かったような気がしている。が、それはことによると、僕の記憶の間違いかも知れない。

## 川開き

やはりこの二州楼の棧敷さじきに川開きを見ていた時である。大川は勿論鬼灯ほおずき提灯ぢようちんを吊った無数の船に埋まっていた。するとその大川の上にどつと何かの雪崩なだれる音が

した。僕のまわりにいた客の中には亀清かめせいの棧敷が落ちたとか、中村楼の棧敷が落ちたとか、いろいろの噂が伝わり出した。しかし事實は木橋だった両国橋の欄干らんかんが折れ、大勢の人々の落ちた音だった。僕は後にこの椿事ちんじを幻灯か何かに映したのを見たこともあるように覚えている。

## ダーク一座

僕は当時回向院の境内にいろいろの見世物を見たものである。風船乗り、大蛇、鬼の首、何とか云う西洋人が

非常に高い桿さおの上からとんぼを切って落ちて見せるもの、——数え立てていれば際限はない。しかし一番面白かったのはダアク一座の操り人形である。その中でも又面白かったのは道化した西洋の無頼漢が二人、化けもの屋敷に泊る場面である。彼等の一人は相手の名前をいつもカリフラと称していた。僕は未だに花キャベツを食う度に必ずこの「カリフラ」を思い出すのである。



中  
洲

当時の中洲は言葉通り、芦の茂ったデルタアだった。僕はその芦の中に流れ灌頂かんじょうや馬の骨を見、気味悪がったことを覚えている。それから小学校の先輩に「これはアシかヨシか？」と聞かれて当惑したことも覚えている。

寿  
座

本所の寿座ことぶきざが出来たのもやはりその頃のことだった。

僕は或日の暮れがた、或小学校の先輩と元町通りを眺めていた。するとトタン亜鉛のなまこいた海鼠板を積んだ荷車が何台も通つて行つた。

「あれはどこへ行く？」

僕の先輩はこう言った。が、僕はどこへ行くか見当も何もつかなかった。

「寿座！　じゃあの荷車に積んであるのは？」

僕は今度は勢好く言った。

「ブリツキ！」

しかしそれはいたず徒らに先輩の冷笑をかうだけだった。

「ブリツキ？ あれはトタンと云うものだ」

僕はこう云う問答の為、妙に悄気しよげたことを覚えていゝる。その先輩は中学を出た後、忽たちまち肺を犯されて故人になつたとか云うことだつた。

## いじめっ子

幼稚園にはいつていた僕は殆どほとん誰にもいじめられなかつた。尤もつとも本間の徳ちゃんには度たび泣かされたものである。しかしそれは喧嘩の上だつた。従つて僕も三

度に一度は徳ちゃんを泣かせた記憶を持っている。徳ちゃん  
は確か総武鉄道の社長か何かの次男に生まれた、負  
けぬ気の強い餓鬼がき大将だった。

しかし小学校へはいるが早いか僕は忽ち世間に多い  
「いじめっ子」と云うものにめぐり合った。「いじめっ  
子」は杉浦誉四郎である。これは僕の隣席にいたから何  
か口実を拵こしらえては度々僕をつねったりした。おまけに  
杉浦の家の前を通ると狼に似た犬をけしかけたりもし  
た。(これは今日考えて見れば Greyhound と云う犬だった  
であろう)。僕はこの犬に追いつめられた揚句あげくとうとう

或畳屋の店へ飛び上がってしまったのを覚えている。

僕は今漫然と「いじめっ子」の心理を考えている。あれは少年に現われたサアド型性欲ではないであろうか？ 杉浦は僕のクラスの中でも最も白晳はくせきの少年だった。のみならず或名高い富豪の妾腹に出来た少年だった。

## 画

僕は幼稚園には行っていたころには海軍将校になるつもりだったが、小学校へはいった頃からいつか画家志願

に変わっていた。僕の叔母は狩野勝玉と云う芳崖ほうがいの乙弟子おとでしに縁づいていた。僕の叔父も亦また裁判官だった雨谷うごくに南画を学んでいた。併しかし僕のなりたかったのはナポレオンの肖像だのライオンだのを描く洋画家だった。

僕が当時買い集めた西洋名画の写真版は未だに何枚か残っている。僕は近頃何かの次手ついでにそれ等の写真版に目を通した。するとそれ等の一枚は、樹下に金髪の美人を立たせたウイスキーの会社の広告画だった。

## 水 泳

僕の水泳を習ったのは日本水泳協会だった。水泳協会に通ったのは作家の中では僕ばかりではない。永井荷風氏や谷崎潤一郎氏もやはりそこへ通ったはずである。

当時は水泳協会も芦の茂った中洲から安田の屋敷前へ移っていた。僕はそこへ二、三人の同級の友達と通って行った。清水昌彦もその一人だった。

「僕は誰にもわかるまいと思って水の中でウンコをしたら、すぐに浮いたんでびっくりしてしまった。ウンコ

は水よりも軽いもんなんだね。」

こう云うことを話した清水も海軍将校になった後、一昨年（大正十三年）の春に故人になった。僕はその二、三週間前に転地先の三島からよこした清水の手紙を覚えている。

「これは僕の君に上げる最後の手紙になるだろうと思う。僕は喉頭結核こうとうけつかくの上に腸結核も併発している。妻は僕と同じ病気に罹りかか僕よりも先に死んでしまった。あとには今年五つになる女の子が一人残っている。……まずは生前のご挨拶まで。」



僕は返事のペンを執りながら、春寒の三島の海を思い、何とか云う発句を書いたりした。今はもう発句は覚えていない。しかし「喉頭結核でも絶望するには当たらぬ」などという気休めを並べたことだけは未だにはつきりと覚えている。

## 体 刑

僕の小学校にいた頃には体刑も決して珍しくはなかった。それも横顔を張りつける位ではない。胸ぐらをとつ

て小突きまわしたり、床の上へ突き倒したりしたものである。僕も一度は擲なぐられた上、習字のお双紙をさし上げたまま、半時間も立たされていたことがあった。こう云う時に擲られるのは格別痛みを感じずるものではない。しかし、大勢の生徒の前に立たされているのは切ないものである。僕はいつか伊イタリイ太利のファツシヨは社会主義にヒマシユを飲ませ、腹下しを起こさせると云う話を聞き、たちま忽ち薄汚いベンチの上に立った僕自身の姿を思い出したりした。のみならずファツシヨの刑罰もあるいは存外当人には残酷ではないかと考えたりした。

## 大 水

僕は大水にも度たび出合った。が、幸いどの大水も床の上へ来たことは一度もなかった。僕は母や伯母などが濁り水の中に二尺指しを立てて、一分殖ふえたの二分殖えたのと騒いでいたのを覚えている。それから夜は目を覚さますと、絶えずどこかの半鐘が鳴りつづけていたのを覚えている。

## 答 案

確か小学校の二、三年生の頃、僕等の先生は僕等の机に耳の青い藁半紙わらばんしを配り、それへ「可愛いと思うもの」と「美しいと思うもの」とを書けと言った。僕は象を「可愛いと思うもの」にし、雲を「美しいと思うもの」にした。それは僕には真実だった。が、僕の答案は生憎先生あいにくには気に入らなかつた。

「雲などはどこが美しい？ 象も唯大きいばかりじゃないか？」

先生はこうたしなめた後、僕の答案へ×印をつけた。

## 加藤清正

加藤清正は相生町二丁目の横町に住んでいた。と云つても勿論よろいむしや鎧武者ではない。極ごく小さい桶屋だった。しかし主人は標札によれば、加藤清正に違ちがいなかつた。のみならずまだ新しいこんのれん紺暖簾の紋も蛇の目だった。僕等は時々この店へ主人の清正を覗のぞきあに行つた。清正は短いあご髭ひげを生やし、金槌かなづちや鉋かんなを使つかっていた。けれども何か僕

等には偉そうに思われて仕かたがなかった。

## 七不思議

その頃はどの家もランプだった。従ってどの町も薄暗かった。こう云う町は明治とは云い条、まだ「本所の七不思議」とは全然縁のない訳ではなかった。現に僕は夜学の歸りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪の向うに莫迦<sup>ば</sup>噓<sup>か</sup>し<sup>ば</sup>を聞いたのを覚えている。それは石原か横網<sup>よこあみ</sup>かにお祭りのあつた噓<sup>ば</sup>し<sup>か</sup>だつたかも知れない。しかし僕は

二百年來の狸の莫迦嚙しではないかと思ひ、一刻も早く家へ歸るようにせつせと足を早めたものだった。

## 動員令

僕は例の夜学の歸りに本所警察署の前を通った。警察署の前にはいつもと變り、たかはりぢようちん高張提灯が一對ともしてあった。僕は妙に思ひながら、父や母にそのことを話したが、誰も驚かなかつた。それは僕の留守の間に「動員令発せらる」と云う号外が家にも来ていたからだつた。僕

は勿論日露戦役に関するいろいろの小事件を記憶している。が、この一対の高張提灯ほど鮮かに覚えているものはない。いや、僕は今日でも高張提灯を見る度に婚こん礼にちや何かを想像するよりもまず戦争を思い出すのである。

## 久井田卯之助

久井田と云う文字は違っているかも知れない。僕は唯彼のことをヒサイダさんと称していた。彼は僕の実家にいる牛乳配達配達の一人だった。同時に又今日ほど沢山いな



い社会主義者の一人だった。僕はこのヒサイダさんに社会主義の信条を教えて貰った。それは僕の血肉には幸か不幸か滲み入らなかつた。が、日露戦争中の非戦論者に悪意を持たなかつたのは確かにヒサイダさんの影響だった。

ヒサイダさんは五、六年前に突然僕を訪問した。僕が彼と大人同士の社会主義論をしたのはこの時だけである。(彼はそれから何箇月もたたずに天城山あまぎさんの雪中に凍死してしまった)しかし僕は社会主義論よりも彼の獄中生活などに興味を持たずにはいられなかつた。

「夏目さんの「行人」の中に和歌の浦へ行つた男と女とがとうとう飯を食う気にならずに膳を下げさせる所があるでしょう。あすこを牢の中で読んだ時にはしみじみもつたい勿体ないと思いましたよ」

彼は人懐こい笑顔をしながら、そんなことも話していったものだった。

## 火 花

やはりその頃の雨上がりの日の暮、僕は馬車通りの砂

利道を一隊の歩兵の通るのに出合った。歩兵は銃を肩にしたまま、黙って進行をつづけていた。が、その靴は砂利と擦れる度に時々火花を発していた。僕はこのかすかな火花に何か悲壮な心もちを感じた。

それから何年かたった後、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とか云う小品集を読み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを発見した（僕に白柳秀湖氏や上司かみつかさし小剣氏しょうけんの名を教えたものも或はヒサイダさんだったかも知れない）。それはまだ中学生の僕には僕自身同じことを見ていたせいか、感銘の深いものに違いなかった。僕はこの

文章から同氏の本を読むようになり、いつかロシヤの文学者の名前を、——ことにトゥルゲネフの名前を覚えるようになった。それらの小品集はどこへ行つたか、今はもう本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章に未だに愛惜を感じている。殊に東京の空を罩こめる「鳶色とびいろの靄」などと云う言葉に。

## 日本海々戦

僕等は皆日本海々戦の勝敗を日本の一大事と信じてい

た。が、「今日晴朗なれども浪高し」の号外は出ても、  
勝敗は容易にわからなかった。すると或日の午飯ひるめしの時間  
に僕の組の先生が一人、号外を持って教室へかけこみ、  
「おい、みんな喜べ。大勝利だぞ」と声をかけた。この  
時の僕等の感激は確かに又国民的だったのである。僕  
は中学を卒業しない前に国木田独歩の作品を読み、何で  
も「電報」とか云う短篇にやはりこう云う感激を描いて  
あるのを発見した。

「皇国の興廢この一挙にあり」云々の信号を掲げたと  
云うことは恐らくは如何なる戦争文学よりも一層詩的な

出来事だったであろう。しかし僕は十年の後、海軍機関学校の理髪師に頭を刈って貰いながら、彼も亦日露またの戦役に「朝日」の水兵だった関係上、日本海々戦の話をした。すると彼はにこりともせず、極めて無造作にこう云のだった。

「何、あの信号は始終でしたよ。それは号外にも出ていたのは日本海々戦の時だけですが。」

## 柔術

僕は中学で柔術を習った。それから又浜町はまちよう河岸がしの大竹と云う道場へもやはり寒稽古などに通ったものである。中学で習った柔術は何流てんしんようしんりゆうだったか覚えていない。が大竹の柔術は確か天真揚心流てんしんようしんりゆうだった。僕は中学の仕合たちまいへ出た時、相手の稽古着へ手をかけるが早いか、忽ち見事な巴投げを食い、向う側に控えた生徒たちの前へ坐っていたことを覚えている。当時の僕の柔道友たちは西川英次郎一人だった。西川は今は鳥取の農林学校か何

かの教授をしている。僕はその後も秀才と呼ばれる何人かの人々に接して来た。が、僕を驚かせた最初の秀才は西川だった。

## 西川英次郎

西川は渾名あだなをライオンと言った。それは顔がどことなしにライオンに似ていた為である。僕は西川と同級だった為に少からず啓発を受けた。中学の四年か五年の時に英訳の「獵人日記」だの「サツフオオ」だのを読み嚙かじつ



たのは、西川なしには出来なかつたであろう。が、僕は西川には何も報いることは出来なかつた。若<sup>も</sup>し何か報いたとすれば、それは唯足がらをすくつて西川を泣かせたことだけであろう。

僕は又西川と一しよに夏休みなどには旅行した。西川は僕よりも裕福だつたらしい。しかし僕等は大旅行をしても、旅費は二十円を越えたことはなかつた。僕はやはり西川と一しよに中里介山氏の「大菩薩峠」<sup>だいぼさつとうげ</sup>に近い丹波山と云う寒村に泊まり、一等三十五銭と云う宿賃を払つたのを覚えている。しかしその宿は清潔でもあり、食

事も玉子焼などを添えてあつた。

たぶんまだ残雪の深い赤城山へ登つた時であろう。西川はごごみ加減に歩きながら、急に僕にこんなことを言つた。

「君は両親に死なれたら、悲しいとか何とか思うかい？」

僕はちよつと考えた後、「悲しいと思う」と返事をした。

「僕は悲しいとは思わない。君は創作をやるつもりなんだから、そう云う人間もいるということを知って置く

方が善いかも知れない」

しかし僕はその時分にはまだ作家になろうと云う志望などを持っていた訳ではなかった。それをなぜそう言われたかは未だに僕には不可解である。

## 勉 強

僕は僕の中学時代は勿論、復習と云うものをしたことはなかった。しかし試験勉強は度たびした。試験の当日にはどの生徒も運動場でも本を読んだりしている。僕は

それを見る度に「僕ももつと勉強すれば善かった」と云う後悔を伴った不安を感じた。が、試験場を出るが早いか、そんなことはけろりと忘れていた。

## 金

僕は一円の金を貰い、本屋へ本を買いに出かけると、なぜか一円の本を買ったことはなかった。しかし一円出しさえすれば、僕が欲しいと思う本は手にはいるのに違いなかった。僕は度たび七十銭か八十銭の本を持って来

た後、その本を買ったことを後悔していた。それは勿論本ばかりではなかった。僕はこの心もちの中に中産下層階級を感じている。今日でも中産下層階級の子弟は何か買いものをする度にやはり一円持っているものの、一円をすっかり使うことに逡巡してはいないであろうか？

## 虚栄心

或冬に近い日の暮、僕は元町通りを歩きながら、突然往来の人々が全然僕を顧みないのを感じた。同時に又妙

に寂しさを感じた。しかし格別「今に見ろ」と云う勇氣の起ることは感じなかった。薄い藍色に澄み渡った空には幾つかの星も輝いていた。僕はそれ等の星を見ながら、出来るだけ威張って歩いて行った。

## 発火演習

僕等の中学は秋になると、発火演習を行ったばかりか、東京の或聯隊の機動演習にも参加したものである。体操の教官——或陸軍大尉はいつも僕等には厳然としてい

た。が、実際の機動演習になると、時々命令に間違いを生じ、おお声に上官に叱られたりしていた。僕はいつもこの教官に同情したことを覚えている。

## 渾名

あらゆる東京の中学生が教師につける渾名ほど刻薄に真実に迫るものはない。僕は生憎あいにく今日ではそれ等の渾名を忘れていた。が、今から四、五年前、僕の従姉いとこの子供が一人、僕の家へ遊びに来た時、或中学の先生のことを

「マツポンがどうして」などと話していた。僕は勿論「マツポン」とは何のことかと質問した。

「どう云うことも何もありませんよ。唯その先生の顔を見ると、マツポンという気もちがするだけですよ」

僕はそれから暫くの後、この中学生と電車に乗り、偶然その先生の風<sup>ふう</sup>丰<sup>ほう</sup>に接した。するとそれは、——僕もやはり文章では到底真実を伝えることは出来ない。つまりそれは渾名通り、正に「マツポン」と云う感じだった。







日本文学電子図書館

---

「芥川龍之介隨筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行

---



日本文学電子図書館